

◆◆ Appendix (付録) ・ 現代の日本経済の分析 ◆◆

これまで学習したマクロ経済学(ケインズ経済学)を応用して、現代の日本の経済政策を分析してみることにしよう。現代の日本では、インフレをターゲットとした大胆な金融緩和が行われてきたわけだけれど、うまくいっていない。ケインズ経済学は実践的な経済学なので、この理由についても答えが導けるはずなんだね。さらに、今回の金融緩和によって、大きなGDPの伸びも確認されていない。この点についても、具体的な数値を挙げながら、IS-LM分析によって、分析してみることにしよう。

● 金融緩和とインフレの関係を調べよう!

ここ数年、インフレを目標とした、日銀の大胆な金融緩和が行われてきたが、目標値の2%のインフレは今だ実現されていない。本書では、ヘリコプター・マネーとしてP140で解説したように均衡利子率 i_e が比較的高いとき、名目のマネー・サプライ M を M_1 から M_2 に増加させると($M_1 < M_2$)、必ずインフレが生ずることになることを示した。

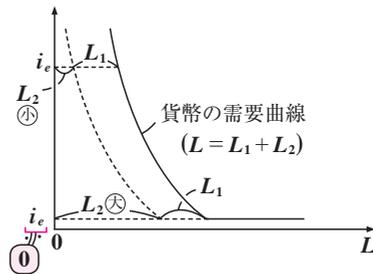
これは、図1に示すように、 i_e が比較的高いときは、貨幣の投機的需要量 L_2 が、取引需要量 L_1 に対して小さいので、これを無視しても構わなかったからなんだね。

しかし、現代の日本経済では、0金利政策が取られているため、図1に示すように $i_e = 0$ においては、投

機的需要量 L_2 は L_1 よりもずっと大きな値になっているはずだ。したがって、このような状況下で、名目的なマネー・サプライ M を異次的に大きくしたとしても、インフレが起こるとは限らない。 L_2 が予想以上に大きければ、まったくインフレは生じないはずで、現実にこの現象が起きていると考えるべきなんだね。

ケインズ経済学が現代でも活きた経済学であることをご理解いただけたと思う。

図1 マネー・サプライとインフレ



● 金融緩和と GDP の関係も考察しよう！

今回の日銀の大胆な金融緩和によっても、大幅な **GDP** の伸びも確認されていない。この点については、具体的な数値を仮定して、**IS-LM** 分析により検討してみることにしよう。

(I) **IS** 曲線の方程式について：

限界貯蓄性向 $s_m = 0.9$ ，必要消費 $C_0 = 175$ (兆円)，

消費税の導入により限界消費性向 c_m は小さくなっているはずなので、 $c_m = 0.1$ とした。

政府支出 $G = 50$ (兆円) とおくと、

$S = I$ ……① $S = s_m Y - C_0 - G = 0.9Y - 225$ ……② となり、

$$(C_0 + G) = 175 + 50$$

また、 $i = \frac{49.5}{I}$ ……③ とおく。①、②より、 $I = 0.9Y - 225$ ……②′

②′を③に代入して、

$$i = \frac{49.5}{0.9Y - 225} = \frac{49.5}{0.9 \cdot (Y - 250)}$$

∴ $i = \frac{55}{Y - 250}$ ……④ となる。(i : 利子率, Y : 国内総所得)

GDP

(II) **LM** 曲線の方程式について：

名目のマネー・サプライ $M = 720$ (兆円)，物価指標 $P = 1$ とおくと、

$L_1 + L_2 = \frac{M}{P} = 720$ ……⑤ となり、また、

$L_1 = 0.8Y$ ……⑥, $i = \frac{4}{L_2} + 0.2$ ……⑦ とおくと、

0金利政策でも、市中銀行が企業に貸し出す最小金利 i_m は $i_m = 0.2(\%)$ 程度はあるものと仮定した。

⑤、⑥より、 $L_2 = 720 - L_1 = 720 - 0.8Y = 0.8 \cdot (900 - Y)$ ……⑥′ となる。

⑥′を⑦に代入して、

$$i = \frac{4}{0.8 \cdot (900 - Y)} + \frac{1}{5}$$

∴ $i = \frac{5}{900 - Y} + \frac{1}{5}$ ……⑧ となる。(i : 利子率, Y : 国内総所得)

以上より、

(I) IS 曲線の方程式：

$$i = \frac{55}{Y - 250} \dots\dots\dots \textcircled{4} \text{ と}$$

(II) LM 曲線の方程式：

$$i = \frac{5}{900 - Y} + \frac{1}{5} \dots\dots\dots \textcircled{8} \text{ の}$$

グラフを図 2 に示す。

④ と ⑧ から、 i を消去して、 Y の 2 次方程式を作り、これを解いて均衡所得 Y_e を求めてもいいんだけど、計算がメンドウになる。よって、ここでは図 2 のグラフから $Y = 506, 507, 508, 509, 510$ のときの④と⑧の i の値を求め、これらがほぼ一致する Y の値を表 1 から求めると、 $Y_e \approx 508.5$ (兆円) となり、 $i_e \approx 0.213$ (%) となることが分かる。

図 2 IS-LM 分析 (I)

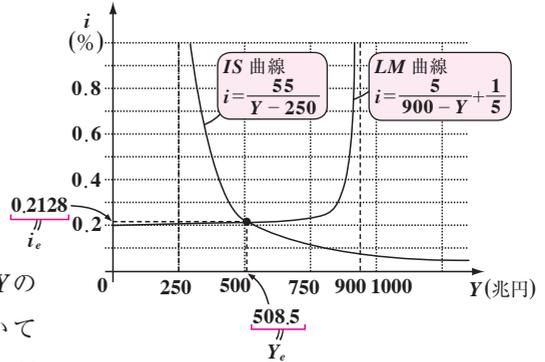


表 1

Y	④の i の値 (IS)	⑧の i の値 (LM)
506	0.2148	0.2126
507	0.2140	0.2127
508	0.2131	0.2127
509	0.2123	0.2127
510	0.2115	0.2128

(II)′ ここで、日銀が新たに名目のマネー・サプライとして、 $\Delta M = 240$

(兆円) を増加させたとする。すなわち、大胆な金融緩和が行われた

としよう。このとき、 M の代わりに、 $M + \Delta M = 720 + 240 = 960$

(兆円) として同様に LM 曲線の方程式を求めると、

$$L_1 + L_2 = 960 \dots\dots\dots \textcircled{5}', \quad L_1 = 0.8Y \dots\dots\dots \textcircled{6}, \quad i = \frac{4}{L_2} + 0.2 \dots\dots\dots \textcircled{7} \text{ より、}$$

$$i = \frac{4}{960 - 0.8Y} + \frac{1}{5} = \frac{4}{0.8(1200 - Y)} + \frac{1}{5}$$

$$\therefore i = \frac{5}{1200 - Y} + \frac{1}{5} \dots\dots\dots \textcircled{8}' \text{ となる。}$$

(I) の IS 曲線の方程式は④のままとして、新たな均衡所得 Y_e' と均衡金利 i_e' を求めてみよう。

(I) IS 曲線の方程式：

$$i = \frac{55}{Y - 250} \dots\dots\dots ④ \text{ と}$$

(II) LM 曲線の方程式：

$$i = \frac{5}{1200 - Y} + \frac{1}{5} \dots\dots\dots ⑧' \text{ の}$$

グラフを図 3 に示す。ここで ④と⑧'の交点 (Y_e' , i_e') を求めるために、 $Y = 513, 514, 515, 516, 517$ のときの④と⑧'の i の値を求め、これらがほぼ一致するときの Y の値を表 2 から求めると、 $Y_e' \doteq 515$ (兆円) $i_e' \doteq 0.207(\%)$ であることが分かるんだね。

(II)' では、マネー・サプライを $\Delta M = 240$ (兆円) も増加させたにも関わらず、GDP に

相当する国内総所得は $Y_e \doteq 508.5$ 兆円から、 $Y_e' \doteq 515$ 兆円に、わずか 6.5 兆円だけ増加したに過ぎない。また、均衡利子率 i_e も $i_e \doteq 0.213\%$ から $i_e' \doteq 0.207\%$ とほとんど変化しないことが分かった。

これは、P192 で解説したように、LM 曲線の内、流動性の罫が反映された Y 軸とほぼ平行な直線部分と、IS 曲線が交わっているからなんだね。図 2, 図 3 のグラフから明らかに、このような場合、 ΔM をさらに大きく、 $\Delta M = 500$ 兆円や 1000 兆円…としても、金融緩和政策はほとんど効果がないことがご理解頂けるはずだ。

このように、今回の金融緩和政策の失敗をケインズ理論から導き出すことができ面白かったでしょう。この本をシッカリ学習すれば、現代の経済政策の有効性についても自分なりに判断できるようになるんだね。何故なら、ケインズ経済学は現代においても、有効な経済理論だからなんだね。

図 3 IS-LM 分析 (II)

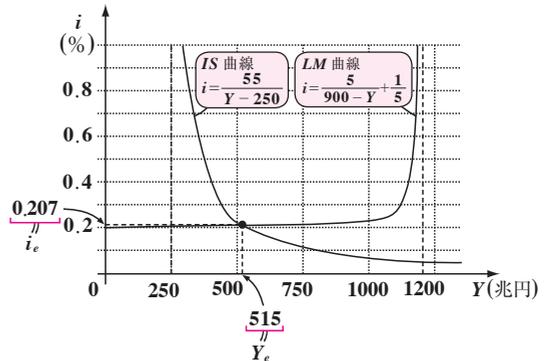


表 2

Y	④の i の値 (IS)	⑧'の i の値 (LM)
513	0.2091	0.2072
514	0.2083	0.2072
515	0.2075	0.2072
516	0.2067	0.2073
517	0.2059	0.2073